

平成28年度 あきたスマートカレッジ (報告)

Bあきた教養講座

B7～10：日本近代文学への招待 明治編

講師：秋田県生涯学習センター
シニアコーディネーター
北条 常久

会場：秋田県生涯学習センター3階 講堂

【趣旨】北条常久シニアコーディネーター・高橋秀晴県立大教授・山崎義光秋田大准教授の3人の先生方による近代文学の講座です。明治期・大正期・昭和前期を代表する作家をリレー形式で取り上げ、時代をたどります。

講座記号	期 日	テーマ	参加者数
B7	5月7日(土)	明治編① 樋口一葉『たけくらべ』・尾崎紅葉『金色夜叉』	70
B8	5月28日(土)	明治編② 夏目漱石『吾輩は猫である』	88
B9	6月25日(土)	明治編③ 森鷗外『舞姫』	77
B10	7月30日(土)	明治編④ 島崎藤村『破戒』	78
合計			313名

北条常久シニアコーディネーター曰く、「『現代の文体がどのようにして成立してきたか』という『文体論』を中心にお話ししたい」ということでした。

ここでは、1回目の講座について報告します。

今年度よりあきた文学資料館名誉館長としても活躍している北条常久シニアコーディネーターが「明治編①樋口一葉『たけくらべ』・尾崎紅葉『金色夜叉』」の講座を行いました。北条コーディネーターが担当する4回は、それぞれの作品に親しむというよりも、「明治期の『言文一致運動』とはどういうことだったかを説明する材料として作品を読む」という内容になっています。



明治初期の作品として、古典の雅文に近いのが『たけくらべ』であり、樋口一葉の原文と円地文子さんの口語訳とを比べてみると、『たけくらべ』の「雅さ」がわかります。明治中期の作品として、尾崎紅葉『金色夜叉』は、会話が口語文そのままであり、他の部分が雅文調になっています。新聞小説が果たそうとしたのは「誰もが読みやすい文章を、標準語で提供する」ことであり、標準語の普及活動でした。明治に入り、外国語の小説が日本に流入します。その翻訳をどうするかを考えたことから新たな日本の小説が生まれたと考えるべきなのです。二葉亭四迷はロシア語から、森鷗外はドイツ語から、夏目漱石は英語から学び、自身の文体を築き上げます。このような過程を経て、話すように書く「言文一致運動」が進んできたのでした。

このような先生のお話により、近代文学が確立した明治後期の夏目漱石や森鷗外ではどのようなお話になるのか、とても楽しみにになりました。